

なんといろしづかな呼吸なのだろう
螢の群れにおほはれる川



〈特集〉
「ベンジャラ」

ア
リ
タ
ノ
ヒ
ビ
キ

二〇二六年三月
15号



短歌：笹井宏之

1982年8月1日、佐賀県西松浦郡有田町泉山に生まれる。
2004年、短歌を作り始める。
2005年10月、連作「数えてゆけば会えます」で第四回歌業新人賞を受賞。
2007年1月、未来短歌会に入会。加藤治郎に師事。同年度、未来賞受賞。
2008年1月25日、第一歌集『ひとさらい』（Book Park）刊行。
2009年1月24日、自宅にて永眠。（享年26）
2011年1月24日、『えーえんとくちから 笹井宏之作品集』（PARCO出版）、
第一歌集『ひとさらい』、第二歌集『てんとろり』（ともに書肆侃侃房）、刊行。
2013年8月1日、新鋭短歌「八月のフルート奏者」（書肆侃侃房）刊行。
2019年1月10日、文庫版『えーえんとくちから 笹井宏之』（筑摩書房）刊行。

ブログ「些細」 <http://sasai.blog27.fc2.com/>

イラストレーション：MATSUICHI

佐賀県伊万里市に生まれる。有田工業高校デザイン科卒。
佐賀市在住。グラフィックデザイナーとして MATGRAPH を営む。
小学生の頃スケッチ大会で入選した衝撃が
絵やアート関係に興味を持つきっかけになる。
2013年佐賀市 PERHAPS GALLERY にて初の個展「浮遊」を開催。
その他グループ展にも参加している。
グラフィックデザインユニット「0点楽第」所属。

<http://matgraph.net>
matsuichi99@gmail.com

ベンジャラ

有田町を流れる川の底には、小石や川藻などに混じって、白く光る磁器の破片があちこちに散らばっているのにお気づきだろうか。なんと、その陶片の一片一片が有田の歴史を語るワンピースであり、法律上は勝手に持ち帰ってはいけない文化財だというのだ。しかも一部の小さな破片から、製作時期や描かれた文様などを識別する研究者の存在にも驚いた。たとえAIでも歴史遺産に染み込んだ人の思いや願いは、人間にか解読できないと信じたい。

文 藤原恵子 写真 片岡聡

「ベンジャラ」の由来

やきものの破片を有田の方言で「ベンジャラ」という。ほとんど価値のない、取るに足りない磁器の典型として、江戸期に女性が紅をさすために使った紅皿という小さな器が、その言葉が訛り、割れて価値のない磁器片を紅皿「ベニザラ」から「ベンザラ」そして「ベンジャラ」と呼ばれるようになった。しかし、そこはやきものに支えられた町である。「秋の有田陶磁器まつり」の際には、割れてしまった器を集めて茶碗供養が行われている。今にして思えばその昔、「有田陶器市」に案内した知人に「どうして、有田町の川には割れた陶器が捨ててあるの？」と尋ねられ、その疑問について当時は答えを持ち合わせておらず、すでに記憶の中からも消えてしまっていたが、今回、その陶片の価値を知って驚くことになった。破片である以上、壊れて捨てられる前には完器としての姿があったはず。実は川底に沈む陶片の中には、完器であれば重要文化財級のものもある。そんなお宝を手にとってみるチャンスに出逢えるかもしれないのだ。コレクターならずも思わず心が躍る！

そんな貴重なものが、日常の何気ない風景の中に転がっているなんて！しかも水流で流されては、また上流から破片が寄せ、何事もなかったかのように川底に佇む。江戸期の有田は、国内はもちろん、遠くヨーロッパをはじめとする海外にまで販路を拡大し、世界に輸出するための磁器を焼いていた。山の斜面に築かれた長大の登り窯では、そうしたヨーロッパ王侯貴族すら白い黄金として熱狂させた磁器の数々が生み出され、そのそばには、出来損ないの器を捨ててそれが堆積する物原ものばらという場所があった。窯から出した時に、うまく焼けなかったもの、ゆがんだり、割れてしまったものなどの器を捨てたらしいのだが、どんな思いで焼きあがった器を捨てたのだろう。当時の陶工たちのつぶやきが聞こえてきそうだ。

子供たちを夢中にさせる「ベンジャラを探そう」体験

有田町歴史民俗資料館では、10年ほど前から、小学校の夏休みに合わせて、高学年の子供たちを対象に「歴史の川ざらい〜ベンジャラを探そう」が開催される。毎年10名限



伊達惇一朗さん

「ベンジャラを探そう」
体験の様子

定となっているこちらの講座は、有田町歴史民俗資料館が企画している体験講座だ。「有田は歴史遺産がこんな身近にあって、その貴重なものを日常的に手に触れることが、他では当たり前じゃないってことを感じてほしいです。」そう話してくれたのは、資料館の学芸員も兼ねる文化財課の伊達惇一朗さん。「歴史の川ざらい〜ベンジャラを探そう」はとても人気のある企画で、募集とともに申し込みが始まると、あつという間に定員に達するらしい。「毎年参加する児童もいるんですよ。」スマホゲームに夢中になる今どきの子供たちが、河原に落ちていたる陶片探しに夢中になる。「ベンジャラを探そう」とは？講座の魅力をお聞きした。「講座では、子供たちに全部で7個の陶片を厳選して拾い集めてもらいます。」それらを学芸員の方が逐一鑑定するのだという。「陶片は年代別にポイントがついていて、古いものほど高得点です。江戸時代前期の17世紀が最高の30点、18世紀が10点、19世紀は5点で、明治時代以降は0点といった具合です。子供たちはもちろん全集中で陶片を探すのですが、同伴の親御さんも一緒になって夢中で探されていますよ。」

体験学習の終了後、子供たちが拾った7個のベンジャラの中で特徴的な1個を選んで、作られた時代や、器の名前など、学芸員さんからのコメント入りの鑑定書が渡される。たとえば、過去の例を拝見すると、ベンジャラの名前は「染付花鳥文芙蓉手小皿」そのほかちまもんふようでこしら。作られた時代は「1660年〜1680年代」とあり、陶片で欠損した部分までわかる、類品の完器の写真まで掲載され、その器は主にヨーロッパに輸出されたもので、当時、有田が世界で一番有名な磁器の産地だったとの解説付き。そこで、私たち取材班も発掘調査隊になりきり、陶片探しの体験！まるで目利きになったつもりで、古そうな陶片を物色し、伊達さんに判定していただいた。上質でなんとなくお宝に見えそうな絵柄で欠けた感じも骨董品に見える陶片を見つけ「こちらはいかがでしょう！」と差し出すと「これは残念ながらポイントなしです。」と即答。あまりにも新しいものらしく、呉須の色合いで識別できるという。「呉須は、染付製品の藍色の描画に用いられ、かつては中国から輸入されたコバルトやマンガンなどを含む天然顔料で、現代の合成コバルトとは、鮮やかさが違うんですよ。」絵具さえも、年代や素材によっ

て発色が違うのだそう。伊達さんの知識には驚くばかりで、聞けば神奈川県のご出身。佐賀に移り住んだのは考古学を選考した学生の頃の夢をかなえるため。その夢につながるきっかけは、小学生の頃に訪れた吉野ヶ里遺跡なのだそう。幼いころに受けたインスピレーションは、感動を追いかけて夢へ向かわず原動力となる。そんな夢との出会いを有田焼の陶片探しから体験してほしいとの思いが



「実はこの陶片がとても人気だったんですよ。ある時、かごの中の陶片をしゃがんで見ていたおばあちゃんが、これは縁起ものなのよって教えてくれたんです。」器の「欠け」は「おかけ」、さらに「おかげさま」と呼ばれ、昔から縁起が良いと言われているんだと。それ以来、陶片は貴重な作品の一つ。陶片をモチーフに有田の文様を描きながら、ペンダントトップにしたり、イヤリングなどのアクセサリにしてきた。今では観光客をはじめ多くの方が有田町の旅の記念品として購入される看板商品だ。陶片にはいろんな絵柄を染め付けているのだが、京都のご実家は西陣織の呉服屋さんという眞砂子さんは、織物にも共通する日本の文様のことを話してくださいました。「波が重なる青海波文様は、末広がりやの平安を意味するんです。唐草文様は長寿とか、子孫繁栄とかね。日本文様っていろんな意味があるんですよ。」今も昔も家族を思い、健康を願う人の思いは変わらない。ものに魂があるとすれば、当時の陶片が伝えてくれるメッセージは現代人にも響くものがあるだろう。有田の川のせせらぎの中、静かに眠りにつく陶片は400年の歴史を支えた証として私たちのくらしの傍にいます。

「ベンジャラを探そう」を通して伝わっているのだろう。実際、この体験がきっかけで、学芸員の資格を取った学生もいるとのこと。

陶片が生まれ変わって縁起ものになる

弥生の季節、有田の町は雛のやきもの祭り一色となる。和小物などをつるした「さげもん」が本通りの表をにぎやかに飾り、愛らしい姿で観光客を出迎える季節。

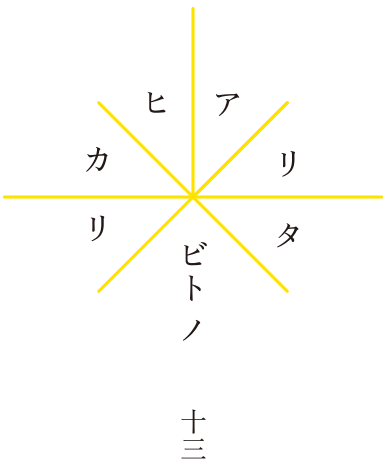
有田駅の近く、雛飾りの「さげもん」の一部に陶片を揺らし、情緒あふれる姿を提案した女流作家がいるということとで尋ねてみた。京都は西陣から20歳で有田に嫁いできた梶原眞砂子さんは、はんなり京都弁の笑顔がすてきな陶芸家。彼女の作品が並ぶ「砂窯」には日常の器や高台の一部を活かした箸置きなど、アイデアあふれる陶磁器が並んでいる。陶片が作品になったきっかけはコロナ明けに開催された秋の陶磁器まつり。作品を作ることも描くこともない日が続き、久しぶりに再開する陶磁器まつりを前に、思いつくまま割れた陶片に文様を描いて並べてみたという、



有田の町並みと「さげもん」



梶原眞砂子さん



文 | 藤原恵子
写真 | 片岡聡

花田 宇利 さん

Hiroshi Hanada



転職ともなった大阪のアパレル会社の社長との出会いもその流れからだった。「とにかくUターンする前にその人と一緒に仕事がしたくて、編集の仕事も大好きでしたがためらわず転職してしまいました。」その展開の早さに思わず私も「えー！」と声がでてしまった。その思い切りの良さには、さすがにまわりからも大きな反対があったらしい。

転職してからというもの、少しでも会社に貢献できないものかと策を練る。入社3年をすぎた頃には、オリジナルの靴下を企画していた。ユニークな靴下専門部は、当たりクジ付きというワクワクのおまけつき。ラッキーソックスの独立記念日を迎えるきっかけとなった。取り扱う靴下は、自然由来の原料と素材で作られたもの。私も、靴下を購入してみただけで、その履き心地たるや、しなやかさと緩さがほどよく肌に馴染み、下ろしたての新品なのに柔らかい質感がちょうどいい。適正価格とはいえ、これまで購入してきたものと比べると少しお高めでも納得の履き心地。「靴下のこだわりは何ですか？とよく聞かれるのですが、自分たちも納得できるものを作ろうと思ったからこの品質と価格になったという感じなんです。」モノづくりのスタンスは自分たちも一消費者として気兼ねなく使えることを使う人の立場になって素材選びやコスト面も考える。まさに

人生、誰と出会うか、何を選ぶか。人は一日に約2万回選択をするというけれど、そこには直感を大事に選ぶというコツがある。

今回のアリタビトノヒカリでご紹介する花田さんは、まさに直感に導かれるままコトを選びとってきたヒト。そしてそこには、心から人に喜んでもらいたいという想いがある。

当たりが出たらもう一足！なんと当たりクジに一足もらえるという、世界初の当たり付き靴下、その名も「ラッキーソックス」。有田町という国宝級の歴史文化に囲まれたやきものの町で、靴下だけで需要は成り立つのかと単純に気になった。とはいえ、有田町で人気のスポットだと聞き、早速足を運んでみることに。

すがすがしい笑顔で出迎えてくれた花田さんは、地元有田町出身の方だった。「そもそも靴下やお店を始めからやろうと思っていたわけじゃないんです。」高校を卒業後、一浪して横浜で5年間の大学生活、流れのまま東京で雑誌の編集者となる。携わった雑誌は『モノマガジン』。毎月こだわりの特集記事が表紙を飾る。「あるとき全国の伝統工芸やその作家の方々を特集する企画があったんです。それが有田の魅力とモノを作るとはどういうことかを知るときっかけになりました。」そして

ユーザー在りき。その気持ちのよさが今の時代に受け入れられる気がする。モノがあふれる時代に、コンセプトの心地よさ風通しのよさは必須。同じ店内に奥様が手掛けるショップ「コトブキベイク」というテイクアウトコーナーがあるのだが、こちらの商品も食感がくせになる米粉のクッキーや牧場直送のソフトクリームなどイチ推しのコーナーだ。商品は靴下と一緒にギフトにしても喜ばれている。国内製造の靴下は10%程度と言われ、ファストファッションが主流の日本の市場で、日本人が作る日本製の靴下はとても貴重。今後の展開をお聞きしたところ、「近隣でお店を広げていきたいですね。ゆくゆくは自分たちで生産できるようにも。」夢は広がる。そして仲間がいる。出会った人がラッキーに！その人を応援する心意気にきつと運が味方してくれている。そう思える「ラッキーソックス」に万歳！





花蝶文手付き皿（高さ11cm×直径10cm）

私の一点

第十五回

矢田久美子

文||筒井ガンコ堂
写真||片岡聡

国の天然記念物である泉山の大公孫樹ちゅうそうじゆのすぐ近く、平屋の古民家を改造して、矢田久美子さんは「ギャラリー・テンプルトレイ」を営んでいる。ご本人も有田国際陶磁展で入賞した実績ある陶芸家だが、店内の棚には自作のほか、知人の作品やヴィンテージ物のロイヤル・コペンハーゲンの製品を並べ、手頃な値をつけて販売している。

熊本市出身の矢田さんの経歴を伺うと、実に悠々とした歩みで、やさしいものだけで仕事をしようになつてまだ五年程だとか。京都市立芸術大学工芸科で染織を学んだ後、デザイン専門学校で十二、三年教鞭けんを執る。そのうち物を「つくる」ことに心が傾き、有田窯業大学校

に入学、専門課程まで五年間学ぶ。卒業後、有田の工業組合のアルバイトをしたり、有田工業高校のデザイン科の講師をしたりしながら陶芸の修業を積んで独立、ギャラリーを開業した。

ご本人の作品を拝見したが、茶道具の碗や洋風のティーカップ、皿など、白い磁肌に繊細な赤色の花模様はながらみが描かれ、いづれも気品に満ちた、さちんとした器であった。

そんな矢田さんの「私の一点」は、ご自身の作風とは似ても似つかぬ五代目佐藤走波氏の作品。ネットのオークションやフリマサイトで見つけた物で、走波氏が有田の人と知って、「これも有田！」と驚き、惹き付けられたという。

厚手の器に施された手描きの、淡い色遣いの絵が、伝統的な有田の意匠とは全く異なり、自在で、楽しんで、その気取りのない作品に温か味ぬくみが感じられ、作者の手柄てがままで偲しのばれ、すっかり魅せられて早速手に入れたという。その後も見つける度に買い集めているとか。後に走波氏が一水会系の水彩画協会の会員だったと知る。

ところで、店名の「テンプルトレイ」はデンマーク語で公孫樹のことだとか。ロイヤル・コペンハーゲンと併せてデンマーク語でいっているが、姉上あねさまがデンマーク在住で矢田さんも屢々彼の国を訪れているということことで納得した。

おいしい有田をいただきます

第十五回

かぞぐるま

スリランカプレートと ラッシー

文 筒井ガンコ堂

写真 片岡聡



ガラスを多用した明るい店内で、店主の富田紗貴さんの話を伺った。奥にガラス越しに広く明るい厨房が見える。東京生まれの富田さんの有田への愛は、幼年時代に家族と共に心地良く、楽しく暮らした良き思い出に発している。父上（川橋氏）が九州陶磁文化館などを手懸けたA建築事務所所属で、富田さんは四歳から小学校卒業まで有田で過ごした。正に古里なのだ。有田ひいては九州への思いはずっと変わらず、福岡の大学を選び、大学院まで進む。専攻

は建築。就職も福岡のガス会社だった。結婚後数年経って建築家の夫君がドイツに留学することになり、富田さんは躊躇なく子供と共に同行、フランクフルトに住む。満六年滞在。その間、ドイツ料理に飽き、無性にカレーライスを欲した。夫君が留学生仲間のインド人にスパイス店を教してもらい、種々試して美味しいカレーに仕上げ、家族一同喜んで食した。イタリア産の米も入手できた。

二〇一九年、父上が病に倒れ、急いで帰国、一家は有田に住むことになった。夫君も東京出身だが、新婚旅行そのほか何度も有田を訪ねて馴染んでいて、ドイツに躊躇なく同行したこともあって、有田在住に否やはなかった。

昨年七月、富田さんは満を持して起業、メインは夫が作ってくれたカレーの中で

最も気に入っていたスリランカカレーにした。チキンカレー（二五〇〇円）は、スパイスはコリアンダー、クミン、カルダモン、シナモンなど数種類で、その配合はご主人仕込み。他に五、六種の菜（季節の野菜をアレンジして）を囲りに配し、パドというウラド豆の煎餅せんべいを被せる。彩り良く、美しい。量も程が良い。米はバスマティライス。

まず普通にカレーでライスを食し、あとは全部を混ぜ、パドを砕いてふりかけて食べる。抑えた辛みで口に美味しく、またさまざまな菜の味わいも宜しく、満足した。併せて飲んだラッシー（五〇〇円）も旨うまいかった。カレーにはビーフビーフ（二〇〇〇円）もあり、飲み物、スイーツもいろいろある。なお店名は、亡き母上有田の地で三年程営まれていた洋品店の名を継いでいる。





表紙写真：川底に沈む蜻唐草文様のベンジャラ。

柿右衛門窯 東京店

柿右衛門窯の直営店舗です。
美術館が多い赤坂・六本木エリアに位置し、ゆったりと落ち着いた雰囲気の中でお買い物いただけます。

- 東京都港区赤坂 6-19-44
- 東京メトロ千代田線 「乃木坂駅」より徒歩10分
- 東京メトロ日比谷線 「六本木駅」より徒歩10分
- 都営地下鉄大江戸線 「六本木駅」より徒歩10分
- TEL 03-3586-3841
- 営業時間／9時30分～18時（土曜は9時30分～17時）
- 定休日／日曜・祝日



<http://www.kakiemon.co.jp>

深川製磁「The House 六本木」

東京・六本木にある深川製磁のコンセプトショップ「The House」。マンションの一室の隠れ家的な空間では、都内随一の品揃えで、皆様のお越しをお待ちしております。

- 東京都港区六本木 3-15-11 HOMAT WEST NO.120
- 東京メトロ日比谷線 「六本木駅」より徒歩7分
- 都営地下鉄大江戸線 「六本木駅」より徒歩7分
- 東京メトロ南北線 「六本木1丁目駅」より徒歩5分
- TEL 03-3589-5520
- 営業時間／11時～19時
- 定休日／火曜日



<https://www.fukagawa-seiji.co.jp>

今右衛門 東京店

今右衛門窯直営店ならではの豊富な品揃えとサービスで、十四代今泉今右衛門の作品をはじめ、暮らしの器や新作の数々をご紹介します。

- 東京都港区南青山 2-6-5
- 東京メトロ銀座線・半蔵門線 「青山一丁目駅」より徒歩3分
- 都営大江戸線 「青山一丁目駅」より徒歩3分
- TEL 03-3401-3441
- 営業時間／9時～18時（土曜は9時～16時）
- 定休日／日曜・祝日



<https://www.imaemon.co.jp/tokyo/>

有田に 出会える お店〈東京〉

銀座香蘭社

香蘭社の直営店。明治十二年のショールーム開設以来、銀座の地で営業を続けて参りました。日常使いのアイテムからギフト好適品、希少な美術工芸品まで、幅広く取り扱っています。お気軽にお立ち寄りください。

- 東京都中央区銀座 6-14-20 香蘭社ビル1F
- 東京メトロ日比谷線 「東銀座駅」A1 出口より徒歩3分
- 東京メトロ銀座線 「銀座駅」A3 出口より徒歩5分
- 「みゆき通り」に面しています。
- TEL 03-3543-0951
- 営業時間／10時～18時
- 定休日／日曜・祝祭日・年末年始



<https://www.korانشa.co.jp>

百田陶園 パレスホテル東京店

遙か昔の記憶を引き継ぐように名付けられた「1616/arita japan」。有田焼の伝統を踏襲しながらもこれまでの有田焼とは異なるデザインアプローチを試みている、新しい器のブランドです。

- 東京都千代田区丸の内 1-1-1
- 「大手町駅」C13b出口より地下通路直結
- TEL 03-6273-4765
- 営業時間／10時～19時
- 定休日／なし



<http://1616arita.jp>

KIHARA TOKYO

「奥渋」とも呼ばれる富ヶ谷は、洗練された雰囲気と人を引き付ける情緒があるエリアです。「KIHARA TOKYO」はショップとギャラリー兼オフィスを併設し、400年続く伝統技術を礎に現代の生活に調和する器を発信しています。

- 東京都渋谷区富ヶ谷 1-14-11 2・3F
- 東京メトロ千代田線 「代々木公園駅」より徒歩5分
- 小田急電鉄小田原線 「代々木八幡駅」より徒歩6分
- TEL 03-6407-1571
- 営業時間／11時～19時
- 定休日／月曜日（月曜日が祝日の場合、翌日火曜日）



<https://e-kihara.co.jp>

有田焼やきもの市場 東京・恵比寿店 （榎草場卯一商店）

恵比寿駅から徒歩7分でアクセスに便利な立地。有田焼窯元200社の品を取り扱っています。名入れのギフトなど特注品も、専門スタッフが応えいたします。すべての品を掲載したネットショップもご覧ください。

- 東京都渋谷区広尾 1-4-9
- 東京メトロ日比谷線 「恵比寿駅」①出口より徒歩約7分
- JR山手線 「恵比寿駅」西口より徒歩7分
- TEL 03-5422-7271
- 営業時間／10時～19時
- 定休日／不定休



<http://www.yakimonoichiba-tokyo.com/>

一般社団法人有田観光協会
〈アリタノヒビキ〉15号
取材協力

有田町教育委員会 文化財課 伊達惇一朗 様
砂窯 梶原真砂子 様／TEL.0955-42-2976
ラッキーソックス 花田宇利 様
ギャラリー・テンプルトレイ 矢田久美子 様
かざぐるま 富田紗貴 様

発行元

一般社団法人有田観光協会
住所／佐賀県西松浦郡有田町幸平 1-1-1
TEL. 0955-43-2121 FAX.0955-43-2100
E-mail: kanko@arita.jp



ありたさんぽ
<https://www.arita.jp>

企画制作・編集

アリタノヒビキ 制作委員会
アートディレクション：古賀義孝（Kohga design）
デザイン：秦佳織（Kohga design）